

一月十二日を皮切りに、「平成二十五年度倫理経営講演会」がスタートしました。全国の単位倫理法人会では、講演会の成功に向けて実行委員会を設置し、準備に余念がないことと思います。

企業経営にも、成功への道程があります。それは純粹倫理で言う 事業の倫理 です。倫理運動の創始者・丸山敏雄は、「人は事業をするに当って、目的・準備・秩序・方法を始末と、どれかをふみあやまると、事業の上に故障が起きる。この時、どこがいけないのかと突きとめて、はつきりとそれを止め、事業経営の大道に立ち返って元氣よく進むとき、ただ苦難をのがれるというだけではない新しい広々とした幸福の天地が開けてくる」と述べています。

では、その 事業の倫理 を簡単に記してみましよう。

第一に、「事業経営は何のためにするのか。誰のためにするのか」という目的を明確にすることです。これを文章化したものが、経営の目的である 経営理念 です。

第二に、心の準備として、「関係者すべての心の一致、特にその中心者となる人の夫婦愛和」が必要です。これが事の成否に関わる根本事項です。

第三に、「順序は間違わずに進んでいるか」ということです。「この事業は人のために行なう」という利他の精神が大切です。「出せば入る」のように、人に尽くせば、必ず尽くされるものです。

第四に、「方法や、やり方に間違いはない

苦難を乗り越えた時 倫理の醍醐味を知る



絵・今谷 鉄柱

か」です。これは、関係者が喜んで取り組んでいるかが大切となります。

最後に、「後始末はよいか」ということです。「やれやれ、仕事はすんだぞ」と気を抜くと、そこから物事は崩れていくものです。一つひとつの仕事が終わっても、安易に気を抜かないことが大切です。

このたび倫理経営講演会の関連図書として刊行された『毅然と立つ 体験で綴る経営者の決断』（倫理研究所編）には、倫理法人会会員六名の顕著な体験が収められています。

登場する経営者の体験は、すべて 事業の倫理 に則った経営に転換した時、思いもよらぬ好結果が生じたという内容です。

「企業経営は金のため。頭の中は金のことばかりだった」と述懐する 氏や、「不当解雇」と訴えられて信用が失墜した 氏の体験など、経営上の苦難に出合い、その時どのような対処していったかが詳細に綴られています。先述の 事業の倫理 に合致した方向に転換したことで、その後の企業運営が好転しているのが顕著な特徴です。

掲載者の一人は「倫理を学び、実践しているからといって、苦勞や苦難がなくなるわけではない。一つの苦難を抜けてステップアップしたなら、またそこに苦難が待っている。苦難と出合った時に何かを学び、階段を一つ昇る。それが倫理経営の醍醐味だと思つ」と語っています。

新春を迎えた今、自社の経営が 事業の倫理 に即しているかを点検する、まさに絶好の時期ではないでしょうか。